

第5回前期 Murakami-Sano-Sakamaki Asia Visiting Fellowship 帰朝報告

九州大学整形外科

中 島 康 晴

Murakami-Sano-Sakamaki Asia Visiting Fellow として、タイのチェンマイにあるチェンマイ大学整形外科を訪問して参りました。チェンマイは首都バンコクから北へ 700 km, 空路 1 時間の内陸高地の都市です。チェンマイは 13 世紀から 600 年間続いたランナータイ王朝の首都であり、街の中心にある城郭と周囲の水路、街全体を囲む山々が美しいところでした。人口は周辺部も入れて 160 万人、北部タイの中心都市です。

チェンマイ大学は街の中心に近い場所に位置しており、タイで 2 番目の医学部として 1964 年に設立されています。付属病院も大学の敷地内にあり、北部タイ地域の医療・福祉と医学研究の中心機関の役割を担っています(写真 1)。実際、かなり遠い山間部からも多くの患者さんが来院されていました。周辺には風習がそれぞれ異なる山岳民族も多く、その場合は言葉が通じにくい場合もあるとのことでした。

整形外科 Chairman の Professor Olarn Arpornchayanon は骨軟部腫瘍と外傷が専門で、教室の父親的存在でした。小児整形外科は Dr. Yuddhasert Sirirungruangarn (とても発音できませんので、愛称? である Dr. Tong と呼んでいました) がチーフとして担当し、彼より若い教官が 2~3 名、さらに小児を回っているレジデントが 5~6 名で担当していました(写真 2)。日本のような少子化の波はまだ本格化していないのでしょうか、小児部門は各グループの中でも症例の多いグループの 1 つと説明されました。訪問した際には大腿骨頭すべり症、脊椎側弯症、化膿性膝関節炎から敗血症に至った症例、無治療の先天性股関節脱臼、化膿性股関節炎後の関節拘縮や種々の外傷例が入院されていました。日本との違いは色々なところで認識します。腫瘍切除後の再建で使用されていた massive allograft を見て、「どうして腫瘍用のインプラントを使わないのか?」と聞きましたら、「値段が高すぎて使えない」との返事でした。疾患構成では外傷に加えて感染症の多さも目立ちましたし、慢性疾患でも放置例や重症化した例が稀ではありません(写真 3)。診断できる医師の数やかなり遠い場所から受診する患者さんの地理的な問題が原因と説明されました。

大学病院は救急にも対応しているため、小児も含め、最も多い症例が多い分野は外傷で



写真 1.
チェンマイ大学医学部



写真 2.
チェンマイ大学整形外科の先生方
前列向かって右端がChairmanのProfessor Olarn Arpornchayanon, 後列中央が小児整形外科のチーフであるDr. Yuddhasert Sirirungruangsarn, 前列向かって左端は整形外科のmentor的存在であるDr. Sompan, 前列向かって右から二人目はたまたま訪問されていた高倉先生, その隣が筆者



写真 3. 化膿性股関節炎後の内転拘縮例



写真 4. チェンマイの交通事情
バイクは人々の重要な交通手段で、(法律では禁じられているものの)ヘルメットなしで2人乗り, 3人乗りは当たり前で、整形外科救急の半分以上はバイク事故でした。

した。車が増えたとはいえ、バイクは人々の重要な交通手段で、(法律では禁じられているものの)ヘルメットなしで2人乗り, 3人乗りは当たり前の世界です(写真4)。整形外科救急の半分以上はバイク事故でしたし、小児の骨折も同様にバイク事故に関連したものがかなりの割合を占めます。チェンマイの先生方は“YAMAHA syndrome”とか“HONDA syndrome”と冗談で言われていました。夜の救急には主にレジデントが対応しており、難しい例には教官が呼ばれているようです(飲み会の時などは携帯電話に画像を転送して、指示を出していました)。毎朝7時から症例検討が行われていますが、レジデントが前日

	7:30-7:45	7:45-8:00	8:00-9:00	9:00-12:00	12:00-13:00	13:00-14:00
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						
8						
9						
10						
11						
12						
13						
14						
15						
16						
17						
18						
19						
20						
21						
22						
23						
24						
25						
26						
27						
28						
29						
30						
31						

写真 5. 週刊スケジュール

外傷例が多いため、毎日のように骨折カンファレンス(Fracture review)が行われていた。

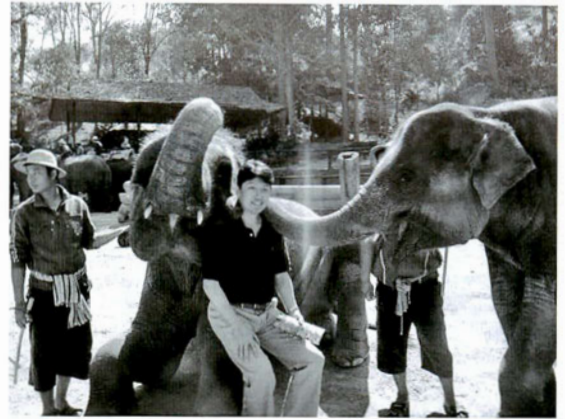


写真 6. エレファントキャンプでの筆者

の救急症例のプレゼンを行います。それに対してスタッフの先生が厳しくコメントされていたのが特徴的です。前述のように外傷が多いので、その勉強会はカンファレンスをはじめ、毎日のように行われていました(写真5)。

周辺の観光にも連れてってもらいました。タイは仏教国ですので、チェンマイ市内にも300もの寺院があります。1080mの山頂に存在するワット・プラ・タート・ドイ・ステープはチェンマイのどこからでも見ることができ、街を守っているかのようでした。エレファントキャンプでは象がサッカーをしたり、絵を描いたりするショウがあり、楽しみました。とても楽しい思い出です(写真6)。

滞在中、チェンマイの多くの先生方とお会いし、知り合いになることができました。色々な国の先生方と知己を得ることが本fellowshipにとって大きな意義だと思っています。今後、小児整形外科を通じてタイと日本との人的交流や親交に微力ながら尽力したいと思います。このfellowshipを創設された故村上先生、故佐野先生、坂巻先生に心より感謝を申し上げるとともに、機会を与えていただきました国分前理事長、清水理事長、亀ヶ谷前国際委員長、川端国際委員長ならびに日本小児整形外科学会の皆様に心より御礼申し上げます。